豊岡市に伝わる民謡の分析

Analysis of the folk song which gets across to Toyooka City

そうだろ節、円山川舟歌、豊岡町民歌から見られる楽曲構成の傾向

Tendency of the musical piece constitution to be seen from a SOUDARO Clause, Maruyama River Sailor's song, a song of Toyooka townsman

茨　木　金　吾

Kingo Ibaraki

はじめに

近畿大学豊岡短期大学論集第９号の“奈佐村に伝わる民謡の分析”により、「近隣の村が編入されるまでの旧豊岡市を中心として、西に位置する奈佐村と東に位置する神美村の行政区域の異なりが伝承民謡の楽曲構成にも表れており、西に位置する奈佐村は、その民謡が呂の五音音階で作られ、東に位置する神美村は、その民謡が律の五音音階により作られ、さらには、その中央に位置する旧豊岡市の民謡は、呂の五音音階と律の五音音階が混在した形で作られ、西と東の行政区域で作られた呂と律による独自の伝承民謡が、その中心に位置する区域で接触し、混じり合い、さらに呂と律が混在した独自の伝承民謡へと変遷していったのではないか」[5] と推察できた。

本稿では、伝承歌として民謡が伝えられてきたその地域性をさらに探るために、2005年４月１日に１市５町が対等合併し、現豊岡市になる以前の城崎郡日高町と城崎郡城崎町に、それぞれ伝承されている代表的な民謡を２曲（そうだろ節・円山川舟歌）と（旧）豊岡市として市政が施行される以前の城崎郡豊岡町と呼ばれていた頃に伝承されていた民謡を１曲（豊岡町民歌）取り上げ、それら民謡の楽曲構成の仕組みを分析することにより、山間部（城崎郡日高町）、沿岸部（城崎郡城崎町）、平野部（城崎郡豊岡町）の３地域における民謡に、その楽曲構成の異なりをみることができるのか、また、前稿までに得られた結果と同様の傾向が見られるのかを、過去の分析で参考にした「日本音楽の音楽理論」[4] に基づいて、これらを分析した。その分析結果を報告する。

調査方法

○調査楽曲：城崎郡日高町、城崎郡城崎町、城崎郡豊岡町に伝承される民謡３曲[1) 2) 3)]

①そうだろ節（作詞・作曲者不詳）音源データ（但馬讃歌の会）‥‥城崎郡日高町

②円山川舟歌（作詞・作曲者不詳）　音源データ（但馬讃歌の会）‥‥城崎郡城崎町

③豊岡町民歌（作詞・作曲者不詳）　音源データ（但馬讃歌の会）‥‥城崎郡豊岡町

今回の調査対象とした民謡である「そうだろ節」、「円山川舟歌」、「豊岡町民歌」について、どの様な背景があるのかについては、“たじまのうたまつり実行委員会”が出版している「たじまのうた第１集」に記載されている。以下に、その部分を引用する。

①そうだろ節（作詞・作曲者不詳）　※「たじまのうた 第１集」45ページ掲載より

神鍋を中心に、日高・豊岡地方で歌い継がれた民謡です。

約二百五十年前の享保年間、神鍋を中心とした山の所有権争いが絶えず、領主や代官所への出訴もたびたびあったようだが、領主が異なっていたことや、幕府の直轄地があったなどの事情で解決しなかった。そこで関係者一同で江戸奉行所に出訴し、二年後、地域が確定、長年の紛争も円満に解決した。祝宴の席で誰歌うともなく歌いだされたのが「そうだろ節」と伝えられる。

以来、めでたい歌として祝宴の席で必ずといってよいほど歌われた。昭和四十一年全国民謡指導種目に採用され、近畿の代表的な民謡として歌い広められた。

②円山川舟歌（作詞・作曲者不詳）　※「たじまのうた 第１集」９ページ掲載より

赤穂市の萬代幸子さんからお便りをいただき、「円山川舟歌」が阪神間の民謡大会などでよく歌われていることを知りました。

ご当地、但馬で最近、聴く機会も少ないので半信半疑でした。すると、萬代さんから民謡大会のプログラムが送られてきて、さらにびっくりしました。一つの大会で、二人も三人もの出場者が歌っていたのです。

この歌は、日高町で採譜された生粋の但馬の民謡です。紹介された当時、フォークグループ「紙ふうせん」が歌ったり、混声合奏曲としても歌われてきました。

③豊岡町民歌（作詞・作曲者不詳）　※「たじまのうた 第１集」51ページ掲載より

昨年十月九日付の紙面で「歌詞にご記憶の方連絡を」として掲載した二曲のうち、一曲の資料が揃いました。「我が家の窓の明け暮れ仰ぐ」以下たった五行の歌詞でしたが、市政施行前の「豊岡町民歌」とわかりました。一昨年、FMジャングルで但馬の歌を紹介した際、養父町の足立裕子さんが寄せてくれた「豊岡尋常小学校校歌」のテープB面に収録されており、新聞で紹介した翌日には、温泉町の田中和子さんから楽譜も送ってもらいました。歌詞不明の箇所は、豊岡市の坪井かづよさんに尋ねました。ありがとうございました。

一つ一つの歌にそれぞれの思いが込められていること、そして歌がつなぐ温かい人の輪を改めて感じることができました。

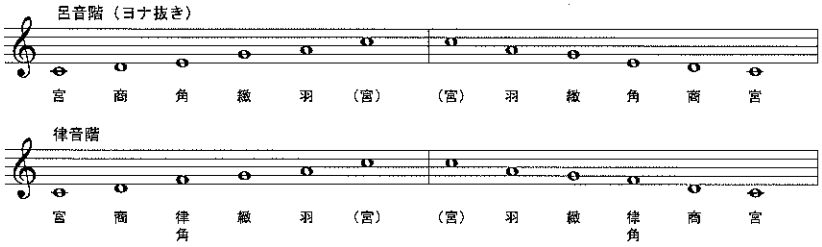
上記のように、これらの民謡は全国的にも有名なものとして伝承されているものや、その発祥の地域ではあまり歌われず、離れた地域で歌い継がれているもの、採譜されて断片的に残っているものに歌詞の補作がおこなわれたものなど、現在に伝承されている形は様々だが、譜面としてその旋律が再現されているものである。

○　調査方法：但馬讃歌の会（沖野芳郎氏）より提供していただいた音源及び、たじまのうたまつり実行委員会「たじまのうた 第１集」に掲載の採譜楽曲３曲を調査楽曲とし、「日本音楽の音楽理論」[4] に基づき、分析を試み、伝承民謡の楽曲構成を山間部（城崎郡日高町）、沿岸部（城崎郡城崎町）、平野部（城崎郡豊岡町）の３地域における地域性から一つの傾向を探った。

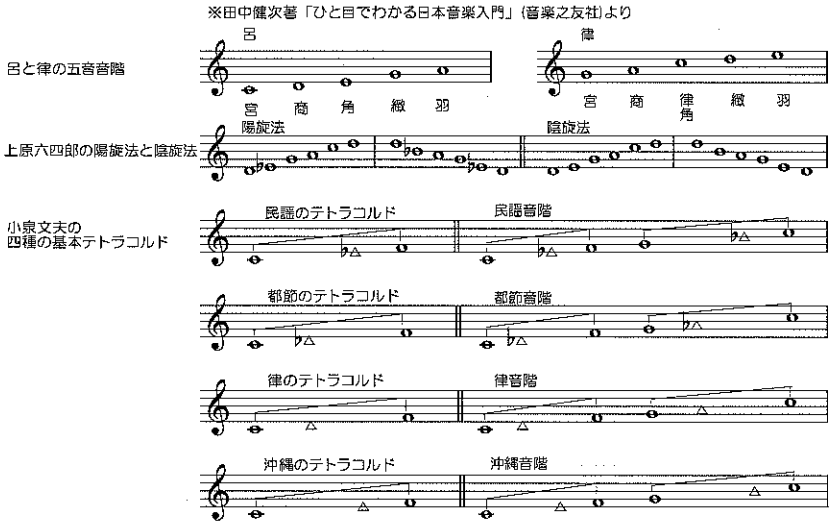
調査結果及び考察

今回の調査によって得ることの出来た楽曲が、譜例１の「そうだろ節」[1]、譜例２の「円山川舟歌」[2]、譜例３の「豊岡町民歌」[3] である。

これらの楽曲は、様々な手法で分析することが可能であるが、共通な楽曲の構成点を見つけるということに視点を置き、前稿までと同様、日本音楽の音楽理論[4] の中のひとつである「呂と律の五音音階」「上原六四郎の陽旋法と陰旋法」「小泉文夫の四種のテトラコルド」に基づいておこなった。それを簡略に表したものが、図－１の呂と律の五音音階と図－２の日本の音楽理論である。



図―１　呂と律の五音音階[4]



図－２　日本の音楽理論[4]

（譜例１）

そうだろ節

作詞・作曲 不詳
音源データ 但馬讃歌の会

M.M. ♩=95

女性

そうだろそうだろ　そうだろな

男性

め　でた　めでー　たーのーわかー

そうだろ　そうだろそうだろ　な

まっーさまよ　ナ　　えだもー　さかーえる

オーサ　そうだろそうだろ　な

ナーーーーェ　はもーしげる　ナ

※譜表内の□で囲まれた部分はヨナ抜きにより、楽曲構成されている部分

［歌詞］

〈一番〉
そうだろ　そうだろ　そうだろな～
めでためでたの　若松さまよナ
そうだろ　そうだろ　そうだろな～
枝も栄えるナ～ェ　葉もしげるナ～
オ～サ　そうだろ　そうだろな～

〈二番〉
そうだろ　そうだろ　そうだろな～
めでためでたが　三つつ重なりてナ
そうだろ　そうだろ　そうだろな～
鶴が御門にナ～ェ　巣をかけた
オ～サ　そうだろ　そうだろな～

〈三番〉
そうだろ　そうだろ　そうだろな～
鶴が御門に　巣をかけたなればナ
そうだろ　そうだろ　そうだろな～
亀がお庭でナ～ェ　舞をまう
オ～サ　そうだろ　そうだろな～

〈四番〉
そうだろ　そうだろ　そうだろな～
亀はお庭で　なんというて舞いやるナ
そうだろ　そうだろ　そうだろな～
お家ご繁盛とナ～ェ　いうて舞う
オ～サ　そうだろ　そうだろな～

（譜例２）

円山川舟歌

作詞・作曲 不詳
音源データ 但馬讃歌の会

♩=60

ふねの　せんどしゅうは　な　ーー　ー　ーーー　なに　ーき　て　ーね

やーーーる　ー　ともを　しきねの　か　ーーー

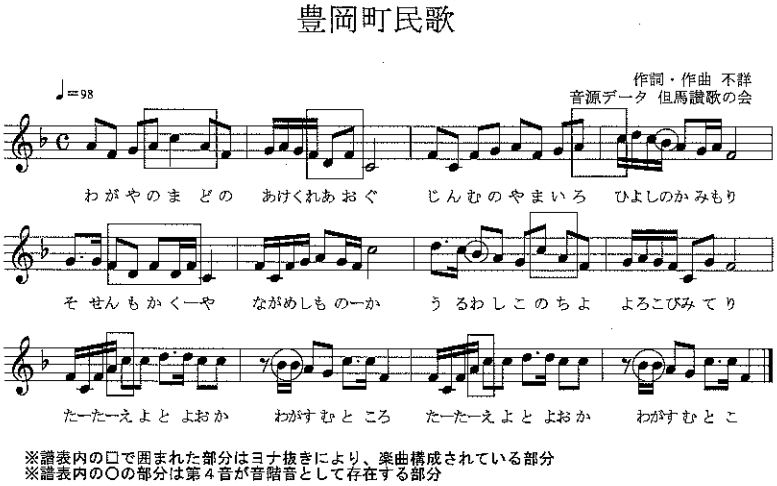
い　ーーー　ま　ーー　ー　ーーーー　ー　くーー　ら

※譜表内の□で囲まれた部分はヨナ抜きにより、楽曲構成されている部分
※譜表内の○の部分は第７音が拍頭音として存在する部分

［歌詞］

〈一番〉
舟の船頭衆はな　何着て寝やる
舳を敷き寝の　かい枕
〈二番〉
雨が降りゃよいな　ザンザカ雨が
愛し殿御さんの　肩休め
〈三番〉
八鹿ここのかな　豊岡を下りゃ
明日は着きます　湯の島へ
〈四番〉
豊岡下に出りゃな　二見の清水
飲んで気もよい　涼やかに
〈五番〉
わしの生まれはな　豊岡船頭
冬の川風　身にしみる
〈六番〉
豊岡よいとこな　朝日を受けて
今津おろしが　そよそよと
〈七番〉
豊岡・豊岡とな　名は高けれど
舟が着きゃこそ　名も豊岡

（譜例３）



［歌詞］
〈一番〉
我が家の窓の　明け暮れ仰ぐ
神武の山色　日吉の神森
祖先も斯くや　眺めしものか
うるわしこの地よ　喜び満てり
讃えよ豊岡　我が住むところ
讃えよ豊岡　我が住むところ
〈二番〉
緑のそよ風　豊けき岡に
甍の波は　渦巻き立ちて
日ごとに増しゆく　人家のどよみ
但馬の文化は　ここより起こる
讃えよ豊岡　我が住むところ
讃えよ豊岡　我が住むところ
〈三番〉
見よや我らの　尊き姿
円山川の　流れに増して
清き一筋　耐えぜぬ努力
この町この家　光を添えん
讃えよ豊岡　我が住むところ
讃えよ豊岡　我が住むところ
〈四番〉
山川秀でて　このよきところ
功なり名をとげ　誉れも高き
人々あまた　我らの誇り
我らも語らん　故郷の歴史
讃えよ豊岡　我が住むところ
讃えよ豊岡　我が住むところ

今回の調査は、但馬讃歌の会（沖野芳郎氏）より提供していただいた音源及び、たじまのうたまつり実行委員会「たじまのうた 第１集」に掲載の採譜楽曲集の中に、譜表として残る楽曲の中から１市５町が対等合併し、（現）豊岡市になる以前の城崎郡日高町と城崎郡城崎町、さらには（旧）豊岡市として、市政が施行される以前の城崎郡豊岡町と呼ばれた地域で伝承されている代表的な民謡を３曲（そうだろ節・円山川舟歌・豊岡町民歌）抽出し（作詞、作曲者が不詳であり、歌われている地域が推察できるもの）、過去におこなった分析方法である「日本音楽の音楽理論」[4]を用いて分析を試みた。

これら３地域は、山間部に位置する城崎郡日高町、沿岸部に位置する城崎郡城崎町、平野部に位置する城崎郡豊岡町による分類によるものだが、豊岡市を中心として、おおむね城崎郡城崎町は北に位置し、城崎郡日高町は南に位置することから、前稿でおこなった東と西の位置関係による分析と同様に、方位からみた楽曲構成の分析ということができる。

これらの分析結果が、前稿で分析したものに近いものであるのか、あるいは異なった地域性を持つものなのかを探ることにより、（旧）豊岡市に伝承される民謡の楽曲構成の地域性をより明確に捉えることに繋がっていくものと思われる。

その結果と分析内容は、次の通りである。

１．山間部に位置する城崎郡日高町に伝承される民謡「そうだろ節」について

城崎郡日高町に伝承される民謡「そうだろ節」の楽曲分析を日本音楽の音楽理論[4]の中のひとつである「呂と律の五音音階」「上原六四郎の陽旋法と陰旋法」「小泉文夫の四種のテトラコルド」に基

づいておこなった結果、次のようなことがわかった。

この民謡は、図－１と２の「呂と律の五音音階」の理論が適応でき、呂音階（ヨナ抜き）（C音・D音・E音・G音・A音・C音）により構成されており、呂音階（ヨナ抜き）の音列そのものの形（C音→D音→E音→G音→A音→C音）が男性パート（主旋律）の歌い始めに展開されており、第４音（F音）、第７音（B音）を抜いた完全な呂音階（ヨナ抜き）で作られている。また、大きな跳躍進行はなく、八分音符の並列を利用した、なだらかな旋律の流れが活かされた民謡であり、女性パートと男声パートを上手に組み合わせた構成のされ方をしている。

２．沿岸部に位置する城崎郡城崎町に伝承される民謡「円山川舟歌」について

「そうだろ節」と同様の手法を用いて分析した結果、城崎郡城崎町に伝承される民謡「円山川舟歌」は、呂音階（ヨナ抜き）（G音・A音・B音・D音・E音・G音）により構成されていることが推察できるが、そうであると確定するには、第７音であるF音が４小節目の拍頭音として存在することである。拍の頭でなければ、経過音として使用されたのであろうことが理解できるが、拍頭音での使用では、呂音階（ヨナ抜き）であることの説明ができない。ただ、呂の五音音階（G音・A音・B音・D音・E音）は適応されているので、呂音階で楽曲構成されていることは確実である。

リズム的には16分音符を多用し、拍の先行音に16分音符を持ってくることにより、歌い始めの効果を出しており、音のうねりを感じさせることができる楽曲構成である。

３．平野部に位置する城崎郡豊岡町に伝承される民謡「豊岡町民歌」について

第４音であるB♭音が３箇所に存在しており、第７音であるE音が完全に抜かれていることから、呂音階（ヨナ抜き）の変形である呂音階（ナ抜き）で構成されているのではないかと思われる。律音階の構成のされ方では作られていないので、呂音階とは思われるが、第４音が抜かれたり、入れられたりと混在した作られ方をしていることがわかる。

また、リズム的には16分音符から２分音符まで、付点音符も含めて各音符を幅広く使用しており、リズムの組み合わせに多様性が見られる。これは現在の楽曲にも通じる流れであり、興味深いものである。

４．山間部に位置する城崎郡日高町に伝承される民謡、沿岸部に位置する城崎郡城崎町に伝承される民謡、平野部に位置する城崎郡豊岡町に伝承される民謡の関連性について

３地域に伝承される民謡の楽曲構成の傾向を見てきたが、それぞれの地域共に、これらの楽曲は呂音階で構成されたものであることが推察できたものの、完全な形で呂音階（ヨナ抜き）を見せたものが山間部に位置する城崎郡日高町に伝承される民謡「そうだろ節」だけであり、沿岸部に位置する城崎郡城崎町に伝承される民謡「円山川舟歌」、平野部に位置する城崎郡豊岡町に伝承される民謡「豊

岡町民歌」は、完全な形での呂音階（ヨナ抜き）は見られなかった。また、これらから律音階を見て取ることができなかったことから、呂音階で構成されていることは推察できるが、沿岸部に位置する城崎郡城崎町に伝承される民謡「円山川舟歌」からは、第４音のみを抜いたヨ抜き音階、平野部に位置する城崎郡豊岡町に伝承される民謡「豊岡町民歌」からは、第７音のみを抜いたナ抜き音階といずれかを残した形で存在しており、何故そのような形で作られたのか、今後の研究の課題として継続していきたい。

ただ、北と南による大きな地域性は見られなかったものの、楽曲が作られた年代と楽曲構成のされ方に、何らかの相関が存在するのではないかと思われる。それは、音の抜き方と入れ方、リズムを構成する音符の種類と組み合わせなど、様々な要因から考えられる。これらを今後の研究の課題としたい。

要　約

伝承歌が伝えられてきたその地域性をさらに探るために、2005年４月１日に１市５町が対等合併し、現豊岡市になる以前の城崎郡日高町と城崎郡城崎町に、それぞれ伝承されている代表的な民謡を２曲（そうだろ節・円山川舟歌）と（旧）豊岡市として市政が施行される以前の城崎郡豊岡町と呼ばれていた頃に伝承されていた民謡を１曲（豊岡町民歌）取り上げ、それら民謡の楽曲構成の仕組みを分析することにより、山間部（城崎郡日高町）、沿岸部（城崎郡城崎町）、平野部（城崎郡豊岡町）の３地域に地域性を分類した場合、それら民謡の楽曲構成に異なりをみることができるのか、また、前稿までに得られた結果と同様の傾向「近隣の村が編入されるまでの旧豊岡市を中心として、西と東ではその位置する行政区の異なりが伝承民謡の楽曲構成にも表れており、西に位置する奈佐村は、その民謡が呂の五音音階で作られ、東に位置する神美村は、その民謡が律の五音音階により作られ、さらには、その中央に位置する旧豊岡市の民謡は、呂の五音音階と律の五音音階が混在した形で作られ、西と東の行政区域で作られた呂と律による独自の伝承民謡が、その中心に位置する区域で接触し、混じり合い、さらに呂と律が混在した独自の伝承民謡へと変遷していったのではないかと思われる。」[5]が示されるのかを、過去の分析で参考とした「日本音楽の音楽理論」[4]に基づいて、それらを分析した結果、この３地域に伝承される民謡の楽曲構成の傾向について、地域ごとの楽曲構成の異なりは見られず、これらの楽曲は、全て呂音階で構成されたものであることが推察できた。しかし、その全てが完全な形で呂音階（ヨナ抜き）として作られておらず、完全な形で呂音階（ヨナ抜き）を形成しているものが、山間部に位置する城崎郡日高町に伝承される民謡「そうだろ節」のみであり、沿岸部に位置する城崎郡城崎町に伝承される民謡「円山川舟歌」、平野部に位置する城崎郡豊岡町に伝承される民謡「豊岡町民歌」は、不完全な形での呂音階（ヨナ抜き）であり、「円山川舟歌」は、第４音のみを抜いたヨ抜き音階、「豊岡町民歌」は、第７音のみを抜いたナ抜き音階と、いずれかの音のみを抜いた形で楽曲の構成がなされており、呂音階（ヨナ抜き）を完全な形で構成しているものばかりでな

いことがわかった。ただ、これらの民謡の楽曲構成から、律音階での楽曲の形成を見て取ることができなかったことから、呂音階で構成されているのではなかろうかと推察できるが、何故そのような形（いずれかの音（第４音か第７音）を残した形）で作られたのか、今後の研究の課題として継続していきたい。

また、前稿で得られた推察と同様の推察は得られなかったものの、楽曲が作られた年代と楽曲構成のされ方に何らかの相関が存在するのではないかと思われる。それは、調査したそれぞれの民謡の音の抜き方と入れ方、リズムを構成する音符の種類と組み合わせなど、様々な要因から見て取れる。これらについても、併せて今後の研究の課題としていく。

最後に、資料を提供していただいた但馬讃歌の会（沖野芳郎氏）に謝辞を申し上げる。

引用文献

1）たじまのうたまつり実行委員会：たじまのうた 第１集、45, たじまのうたまつり実行委員会, 2006

2）たじまのうたまつり実行委員会：たじまのうた 第１集、9，たじまのうたまつり実行委員会, 2006

3）たじまのうたまつり実行委員会：たじまのうた 第１集、51，たじまのうたまつり実行委員会, 2006

4）田中健次：一目でわかる日本音楽入門、41，音楽之友社（東京），2003

5）茨木金吾：奈佐村に伝わる民謡の分析，10-11，第９号，近畿大学豊岡短期大学論集、近畿大学豊岡短期大学，2012

参考文献

1）友田眞一　尾形多藻津　小谷茂夫　大垣三郎　中嶋忠雄　山本兵治　松岡重夫　足立栄一　宮岡房次郎：豊岡民話耳ぶくろ、１-256，豊岡市老人連合会（兵庫），1975

2）茨木金吾：盆踊り唄「べろべろ節」の採譜と分析，1-13，第５号，近畿大学豊岡短期大学論集、近畿大学豊岡短期大学，2008

3）茨木金吾：盆踊り唄「松坂節」の採譜と分析，９-18，第６号，近畿大学豊岡短期大学論集、近畿大学豊岡短期大学，2009

4）茨木金吾：神美村に伝わる民謡の分析，19-26，第８号，近畿大学豊岡短期大学論集、近畿大学豊岡短期大学，2011

5）黒沢隆朝：楽典、11-227，音楽之友社（東京），1966

6）東洋音楽学会：東洋音楽研究第20号、１-192，音楽之友社（東京），1969

7）早稲田みな子：南カリフォルニアの盆踊り，62-78，第52巻１号，音楽学、日本音楽学会，2006

8）高柳蕗子：拾い読みする囃子言葉、「かばん」特別号 特集オノマトペ，三月書房（東京），1997
9）服部龍太郎：日本民謡全集、1-320，角川文庫（東京），1965
10）F. T. Piggott，服部龍太郎訳：日本の音楽と楽器、1-253，音楽之友社（東京），1968
11）吉川英史：日本音楽の歴史、1-469，創元社（大阪），1971
12）町田嘉章・浅野建二：日本民謡集、1-220，岩波文庫（東京），1960
13）たじまのうたまつり実行委員会：たじまのうた 第1集、1-100，たじまのうたまつり実行委員会，2006
14）たじまのうたまつり実行委員会:たじまのうた 第3集、1-100，たじまのうたまつり実行委員会，2009